

絶倫息子が

どスケベボディ母を

どスケベ衣装に着飾らせて

ど淫乱交尾しまくり♡



「ほら、早く起きなさい」

朝、カオリは息子の部屋のカーテンを開けながら
布団の中で身じろぎをしている息子を
起こしていた。

「んう…まだ、もうちょっとだけ…」

「ダメ、学校遅れちゃうでしょ。
ご飯も冷めちゃうし」



いつまでも起きようとしない息子に
半ば呆れつつ、可愛い我が子との戯れの時間を
内心楽しんでる自分がいた。

(ふふっ…ほんと、小さいころから同じね…)

昔から朝が弱く、寝ぼけ眼の息子を立たせて
パジャマを着替えていたことを思い出す。

日々のルーティンと化した親子のやり取り、
どこの家でも行われているであろう、朝の攻防。



：しかし我が家のそれは
他の家庭とは少し違っていた。

身じろぎしていた息子の動きがピタッと止まり、
布団から顔を少し覗かせて悪戯っぽい表情を見せる。

「あのさ、母さん…」

「ん？」

「アレ、してくれたら起きれるかも…」

「!」



息子が言う『アレ』の意味を察し、
カオリの頬が紅潮する。

「だめだってば、もう時間もないし…っ」

「ええー…じゃあ布団から
出れそうにないや…」

そう拗ねながら、また布団の中に潜ろうとする。



「あっ、こちら!...もう...っ」

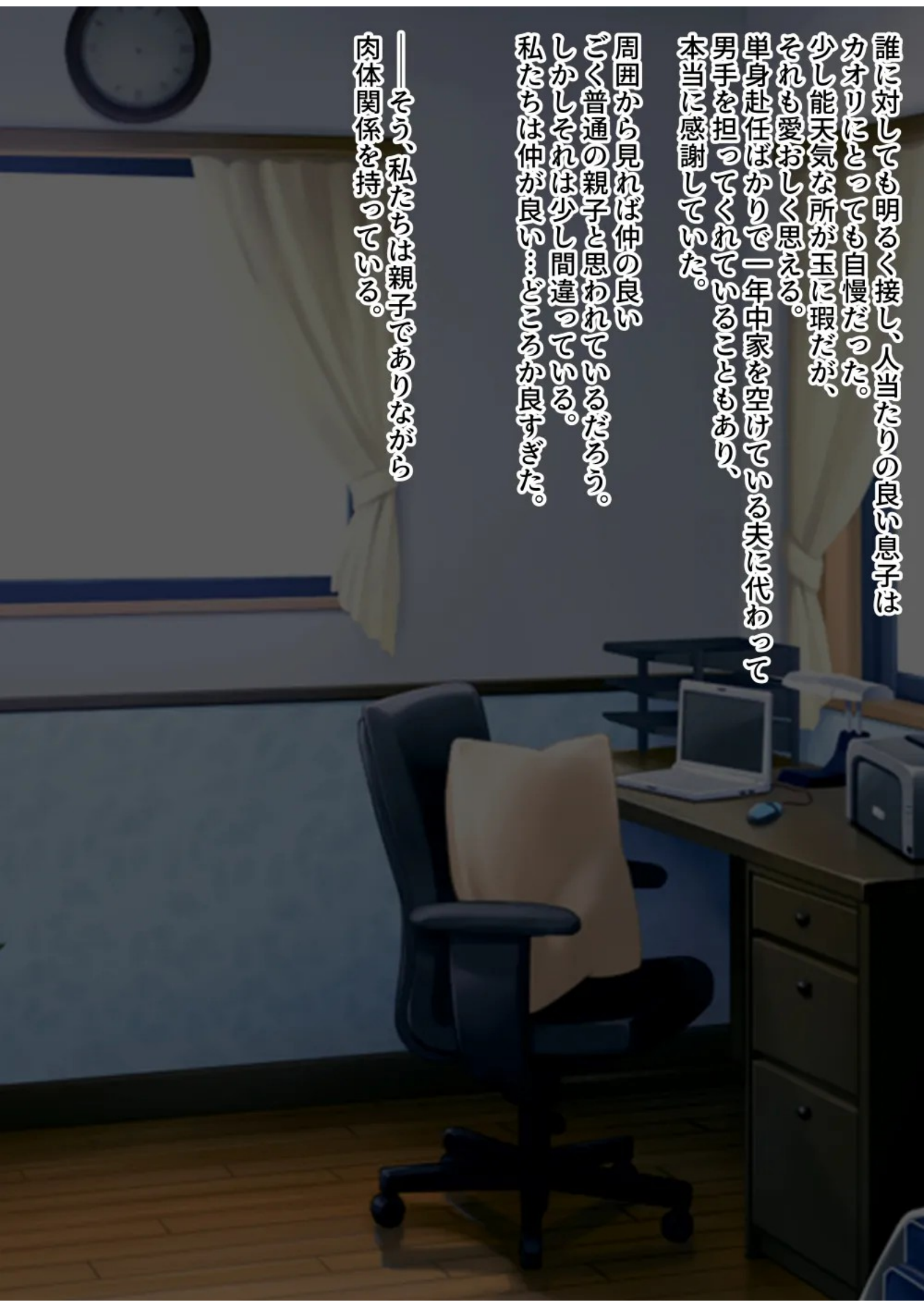
カオリは布団の中で駄々をこねる息子を見ながら
ため息をつく。



誰に対しても明るく接し、人当たりの良い息子は
カオリにとっても自慢だった。
少し能天気な所が玉に瑕だが、
それも愛おしく思える。
単身赴任ばかりで一年中家を空けている夫に代わって
男手を担ってくれていることもあり、
本当に感謝していた。

周囲から見れば仲の良い
ごく普通の親子と思われているだろう。
しかしそれは少し間違っている。
私たちは仲が良い……どころか良すぎた。

——そう、私たちは親子でありながら
肉体関係を持っている。



きつかけはもう思い出せない。それほど長く、深い関係を築いてしまっていた。

夫が居ない生活で、寂しい心をお互いで埋め合っていたこと、日々遅しく育っていく息子に内心ときめいていたこと、いつからか息子の、私に対する視線が熱を帯びてきていたこと……

さすがに最初は戸惑ったが、時間が経つに連れ、私の中で我が子への愛情だけでは説明しきれない感情が芽生えてきた。

それら全てが複雑に絡み合い、気がつけば私は息子を受け入れていた。私が拒まなかったことで、息子は際限なく私を求めた。

初めて息子とセックスをしたあの瞬間から私たちの関係は新しく生まれ変わった。

……たった二人しかいない家の中で、夫に内緒で私たち親子は誰にも明かせない関係を続けている。

だからー

「…しようがない子ね…」

私は息子が包まっているベッドに腰掛けた…





「んっ…早く、出さないね…」

じゅぷ、じゅる、という音が部屋に響く。
遅しく反り立った息子の肉棒を啜えながら
カオリは射精を促していた。

「んっ、んっ、んむっ…♡」

ぢゅぽっ

いゅぽっ

いゅぽっ

男根を喉奥まで啜え込み
頭を上下に動かして口奉仕する。
母の緩急の付いたフェラチオに
息子の腰がビクビクと震える。

「うあ…ッ母さん気持ちいい…っ」

息子の素直な反応に、カオリは思わず微笑む。

(あんなに気持ちよさそうに
感じて…可愛い子…♡)

(ほんと、朝からこんなに大きくして…っ)

夫のモノよりひと回り以上も大きな、信じられないほど膨張し硬くなった息子のペニスを口いっぱい頬張り、舌を絡ませながら、激しく吸い上げる。

「はぁッ…すっ…っ…♡
母さんのフェラ、やっぱ最高ッ…♡」

「んっ…♡ちゅるっ…♡んむっ…♡」
息子の言葉に少し気を良くした私は、さらに激しくしゃぶりつく。
じゅぽっ、ぐぽっと卑猥な水音が響く。

「くっ…!!それやば…♡」



男性器から香る強烈なオスの匂いに
メスとしての本能が疼き、
自然と股間が湿ってきているのを
感じていた。

(やだ…私…っ)



「あッ…母さん、もう…ッ！」

限界が近いらしい。男根が更に硬度を増じ
海綿体が膨れてきたのが分かる。
「んっ♡いいわよ、お母さんの
口に出して…♡♡」

そう言った瞬間、息子のモノが
一際大きく膨れ上がり、
「ッ……出るッ！」

びゅぶ！びゅるっ！びゅるるるるるる！
大量の精子が私の喉奥に放たれた。

「んぶっ!?んっ、むぐうう……!!」
(すごい量……っ♡)



口いっぱい広がる濃厚なオスの味に
酔いしれながら
ごくごく、と喉を鳴らして飲み干していく。

愛する息子から放たれた子種汁を
最後の一滴まで搾り取るように吸い上げる。



「…目は覚めた？」

射精を終え、すっかり蕩け顔になった
息子に尋ねる。

「はあッ…、はあッ…♡
う、うん…っ♡最高だった…っ」

「ふふっ♪
…♡いっさいっつねキキ♡」



「あ、ヤバ…っ！
もうこんな時間だ！」

息子がようやく遅刻ギリギリな時間になっている
ことに気づき、ベッドから飛び起きる。

「だから言ったじゃない！
ほら、早く着替えて！」

慌ただしく支度を始めた我が子を見て
カオリは苦笑をしながら部屋を後にした…





「ほんとに遠慮しなくていいのよ?」

息子は友人のナオヤ君を連れて学校から帰るなり、今の時間までテスト勉強に勤しんでいた。帰り際に晩御飯に誘ったのだが、



「いえ、母がもうご飯作ってると思うんで。ありがとうございます。お邪魔しましたー!! じゃあまた来週な!」

「おー、またな」

ナオヤ君が帰った後、
横に並んで立っている息子に話しかける。

「…ふふ、いい子ね。お母さんが作ってる
から、って」

「…そうだね」



「あてとご飯の準備するから着替えてきなご…
きやっ!?!」

リビングへ戻ろうとした瞬間、
息子に後ろから抱き留められ、
胸を鷺掴みにされた。
むにいと乳房が息子の手の動きに合わせて
形が変えられ、思わず吐息が漏れる。……

「んあっ…ちよつと、
どうしたのっ…?」

「…母さん気付いてた?
ナオヤにずっとヒロイ目で
見られてたこと」

「え…っ」

「さっきジュース持ってきてくれただろ?
机に置いてる間、母さんの
胸とか尻をガン見してたよ」

さつきまで家にいた男の子の顔が
脳裏にちらつく。



「母さんの前ではカッコつけて
行儀良くしてたけど、多分
今日は母さんでオナニーするん
じゃないかな。
こんな風におっぱい揉んでる
想像しながら、ねっ」

もにゆう、更に力強く乳房を揉まれ
「んああ…っ♡」と
我ながら情けない声を出してしまった。



「母さんとセックスしたくてたまらない…っ！
って思いながらチンポしごきまくって
ザーメン出しまくるんだらうなあ…」

耳元で卑猥な妄想を囁かれ、
嫌が応にもイメージをさせられてしまう。

「ちよ、ちよと待ちなさい…っ
友達をそんな風に…んっ♡」

「こんなにエロい身体見せられたら
誰でも交尾したくなるもんなあ…
…みんなが母さんを狙ってで
自分のモノにしようとしてるんだ…っ
くそ…ッ」

胸を揉む手の勢いが増してきて、
息も荒くなってきた。

…それが私にはどこか焦っているように感じた。



「んツ…ちょっと、
落ち着きなさいっ!」

「!!」

思わず強い口調で言っ
てしまい、
息子の手が離れて解放される。



「…いめん」

「はあ…っ、はあ…」

「どうしたのよ…なんか変よ?」

私が尋ねると、息子は少し言いにくそうに言葉を続ける。

「…他の男が母さんのことをエロい目で見ていると、不安になるんだ」

「不安って…:どういうこと?」



「…その、母さんが『取られる』んじゃないかって…」

息子のその言葉に
きゅん、ときてしまう自分がいた。
要は友達に嫉妬した、ということらしい。
もし私が自分の元から離れていったら、と
勝手に想像して焦っていたのだ。

「…ホントにもう、この子は…」

見た目は逞しく成長したとはいえ、
小さかったあの頃と変わらない、
愛しい我が子の姿がそこにあった。

「…ねえ、ちよっといい？」

「?なに、母さん」



「んっ…♡」
私は息子の顔を引き寄せ、そっと口づけをした。

「んっ…!!」

一瞬驚いた息子だったが、すぐに唇の感触に夢中になり始めた。

ちゅっ♡
ちゅっ♡



さらに息子の口内に舌を入れる。
激しく舌を絡ませ、お互いの唾液を
たっぷりと交換する。

「んあ…っ母さん…♡」

息子の舌が私の舌先を捕えようと
追いかけてくる。
私を離したくないと、精一杯になっている
舌使いに、内心笑みが零れる。

私はどこにも行ったりしなげ。
アナタを愛しているのよと諭すように
とびきりの愛情で接吻を交わす。



「…はあ…、
お母さんが誰のモノか、これで
分かってくれた？」

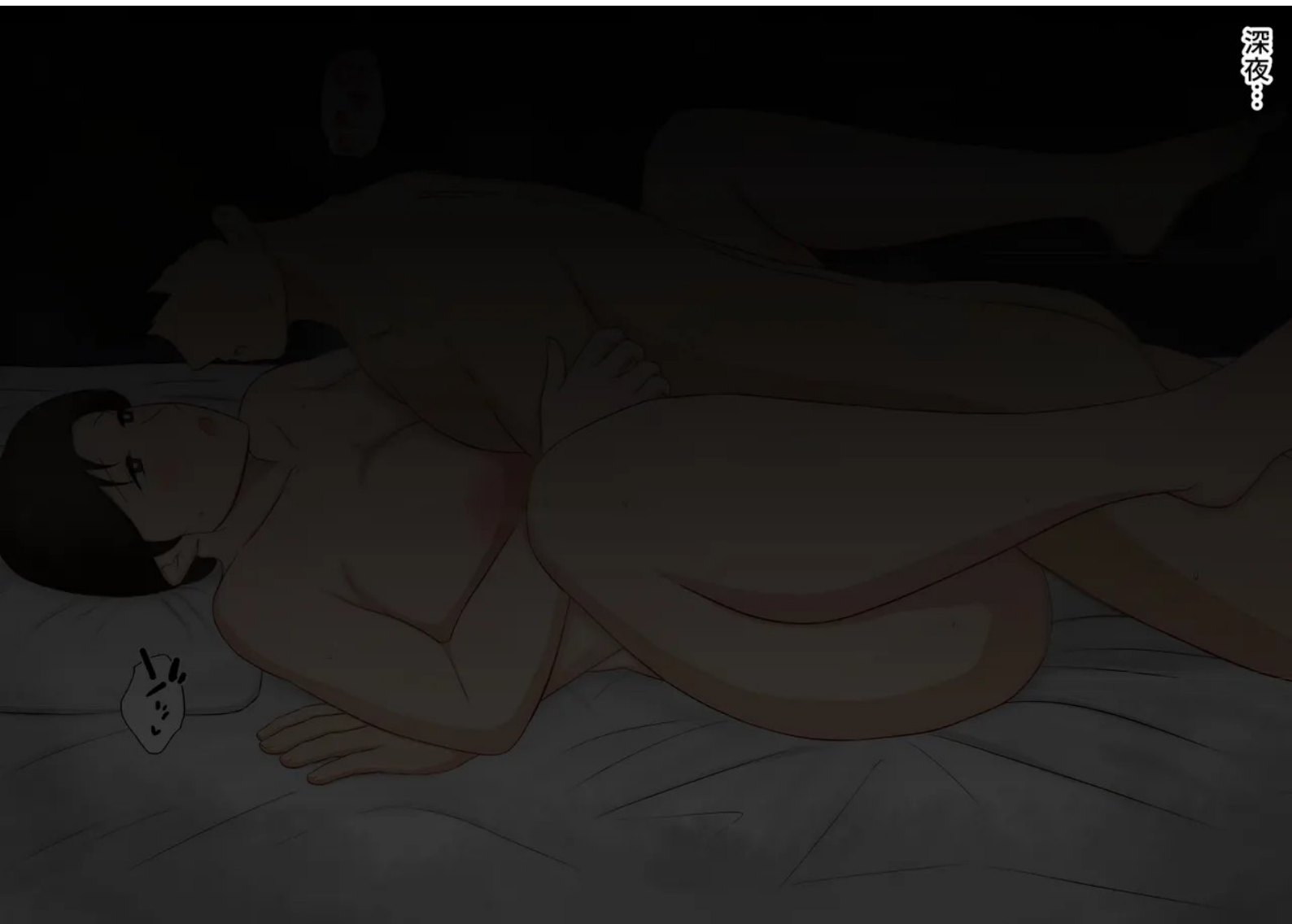
「…はあっ、はあ…♡
は、はい…分かりました…♡」

息子は蕩け顔になったまま、
そう返事をした。

「ふふ、よかった…」









「あっ、あんっ、あんっ、んあっ♡」

「はあッ、今日は寝かさないから…ッ」

夕方に母さんから受けた接吻で興奮した俺は、ひたすらに母さんのカラダを貪っていた。

「んっ♡いいわよ…っ」

好きなだけ付き合っただけあげる、アナタが安心できるまで…ね？♡」

「ありがとう、母さんっ…♡」

んっ

んっ

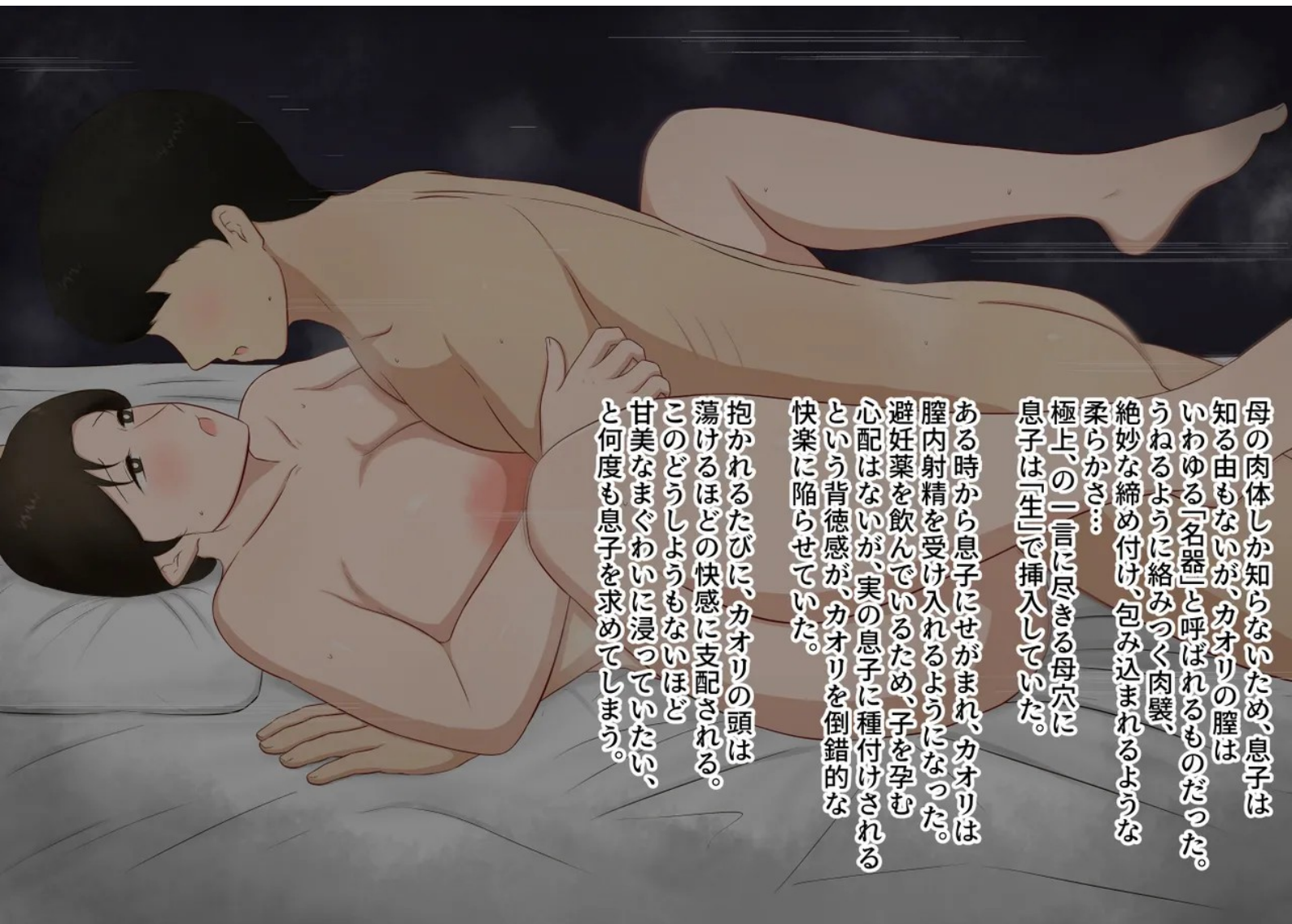
おはこ

んっ

んっ

んっ

んっ



母の肉体しか知らないため、息子は知る由もないが、カオリの膣はいわゆる「名器」と呼ばれるものだった。うねるように絡みつく肉壁、絶妙な締め付け、包み込まれるような柔らかさ……

極上、の一言に尽きる母穴に息子は「生」で挿入していた。

ある時から息子にせがまれ、カオリは膣内射精を受け入れるようになった。避妊薬を飲んでいるため、子を孕む心配はないが、実の息子に種付けされるという背徳感が、カオリを倒錯的な快楽に陥らせていた。

抱かれるたびに、カオリの頭は蕩けるほどの快感に支配される。このどうしようもないほど甘美なまぐわいに浸っていたい、と何度も息子を求めてしまう。

「交尾するために生まれてきたみたい
な身体で男を無意識に誘惑してッ」

「ちッ♡ちがッ♡」

「誘惑なんかしてな…ッ♡んおッ♡」

「母さん…っ！母さんは俺の女だっ！」

「んっ、あんっ、あっ♡」

「そうよ、だから安心していいのっ」

俺のチンポの形をしっかりと
教え込むように、「突き突き念入りに
母さんのマンコを責め立てる。
そのたびにチンポがギュウギュウと
締めつけられ、気を抜くと直ぐに
射精してしまいそうになる。





「母さん、そりゃあうっ…」

「あっ、あんっ、あんっ、あっ♡
いいわよっ、きで…っ♡」

「はあっ…ハア…ッ！
うっ！」

「アキマ」

「アキマ」

「アキマ」

「おん」

「アキマ」

「アキマ」

「アキマ」

「アキマ」

「アキマ」

「アキマ」

「あんまり顔をハロ…♡」

「ん、んむちめん…♡
もう…あんまり見なれど
恥ずかしいから…♡」

「…母のんまなやばる…♡」

「♡♡♡♡えええ大丈夫♡♡」





「R... R...
...」

「...
...」

「...
...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」

「...」



明け方、俺と母さんは宣言通り徹夜で交尾をした。母さんの膣内からはとろとろと精液が零れて垂れていた。

はま♡

はま♡

「はあ…っ、はあ…っ、満足した？」

「うん…今日のところは」

「ふふ、ホントに元気ね…」



「母さんのおかげで良い点取れそう」

「あら、じゃあ期待しちゃうかしら」

母さんと深く愛し合ったことで
とても満たされた気持ちになっていた。





○月×日 午後

テストも無事終わった週末、
俺と母さんはデートに来ていた。



「あら、さっきのクジ引き券
あそこで使えるみたい」

「やってみようよ」

先ほど買い物をしたときに貰った
券を手にも、クジ引き会場の近くまで行くと
係のお姉さんが声をかけてきた。

「あ、くじ引きされますか？」

「はい、これを...」



後ろで結果を待っていると、
カラシカラシカラと音が鳴った。
とハンドベルの音が鳴った。

「きゃー！すいすいすい！等ですよ！
おめでとーうござります！」

「やだ、ちょっと！
お母さん当たっちゃった！」
係の人と母さんが大はしゃぎになっている。

「こちら、○Xリゾートの宿泊券でございます！」



○×リゾート：…そういえばこの前
テレビで特集されていたな、と思い出す。
一か月ほど前にオーブンしたホテルで
プライベートプールが売りになっている
ようだ。

「こちら宿泊券です！」

係の人から手渡されたチケットを
見ながら母さんが笑顔を向ける。

「ねえ、今度行ってみましょう♪」

俺と母さんは旅行の予定を立てながら
次の目的地へと足を向けた。





「それにしても、さっきはビックリしたよね」

「ホント、あの係の子が一番驚いてたわね」

モ

俺と母さんはいつも通っているラブホテルに入り、先ほどの余韻を楽しんでいた。



「ところで母さん、言ってた『アレ』着てくれた？」

「…はいはい、着てきたわよ…っ」

「ママで良かったー!」

「んや」

「だって、あれだけ頼まれたら着ないわけにはいかないでしょう? ……せっかくお母さんのためにバイト代で買ったって、言うから…」



「ごめんごめん。でも嬉しいよ。
…じゃあ、見せてくれる？」

「ちよつと待ってなさい…
ん…じよ」

母さんが服を脱ぎ始める。



「おお……」

服を脱いだ母さんには
ど派手な下着を身にまどっていた。



「やだ、引かないですよ…
アナタが着せたんでしょ」

「違うって！母さんがその、
エロすぎてびっくりしたから…っ
めちやくちや良い…」

母の妖艶な姿に思わず目が奪われる。
いつもは控えめな色のファッションを
しがちな母さんが、男を挑発するような
エグい下着を付けていることに興奮する。

「それって喜んでらるのかしら…」



「母さんがホントに魅力的だったって言ってるんだよ」

「…アナタはまたそりゃいりうことをサラッと言うわね…」

ヒキ♡

「なんかいつもの母さんと違う感じがして、すげー興奮する…」

「…ふっ、」

「喜んでもらえてよかったわ…♡」



「母さん、ちょっとポーズ取ってみてよ」

「ええ？そんなこと言われても...
ムムム...かしら？」



「ムムム」

母さんがぎこちない動きで
手を頭の後ろに回し、腋窩を見せるような
体勢になる。
見られている羞恥心からか
頬を染めながら身を振る姿がたまらなく
俺を興奮させる。

派手な下着に包まれた豊満な乳房や
動くたびに卑猥に揺れる尻肉が
オスの生殖欲求を刺激し、
母さんから漂うエロいオシナの香りに
脳が痺れるような感覚に陥る。

今すぐ目の前の「メス」と交尾しろ、と
本能が命令してくる。

びるんっ♡

ゆさっ♡



「はあっ、はあっ…
母さん、エロすぎ…っ」

「やだ、そんなにジロジロ見ならぬっ♡」



我慢の限界が来た俺は、
「母さん、こっち来て」と
母さんを壁沿いの棚に手を突かせ、
服を脱ぎ捨てた。そして…

「マジで母さんエロすぎ…っ
こんなの我慢できないって…!♡」

「あっ、あんっ、んっ、あんっ♡」

あっ♡

んっ♡

あ…っ♡

んっ♡

あっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡



「あーヤバ、もうイキそ…っ」

「おっ、んおっ、おっ、おっ、おおっ♡」



おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡



あはは!

ぴんぴん
ゆるゆる
るるるる

どきどき

どきどき

ぐんぐん



「おお…ッお…♡」

「んう…っ、あ…♡」

はあ

はあ

は

は

はあ

はあ

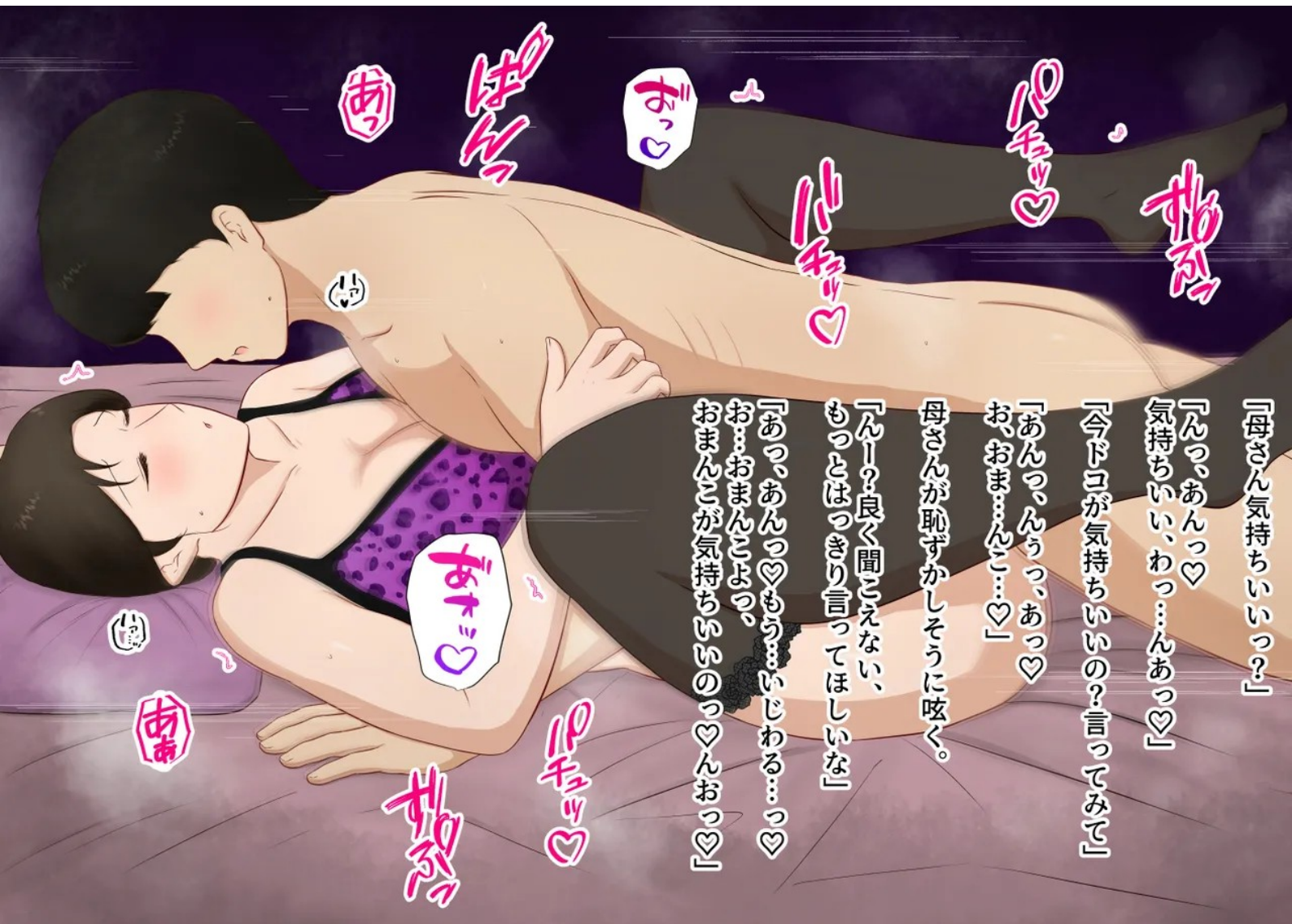
はあ

はあ

はあ

はあ

はあ



「母さん気持ちいいの〜」

「んっ、あんっ♡
気持ちいい、わっ…んあっ♡」

「今ドコが気持ちいいの？言ってみて」

「あんっ、んうっ、あっ♡
お、おま…んい…♡」

母さんが恥ずかしそうに呟く。

「んー？良く聞かえない、
もっとはっきり言ってほしいな」

「あっ、あんっ♡もっ…ごじわる…♡
お…おまんこっ♡」

「おまんこが気持ちいいのっ♡んおっ♡」

おまんこ

おまんこ♡

おまんこ♡

おまんこ♡

おまんこ

おまんこ

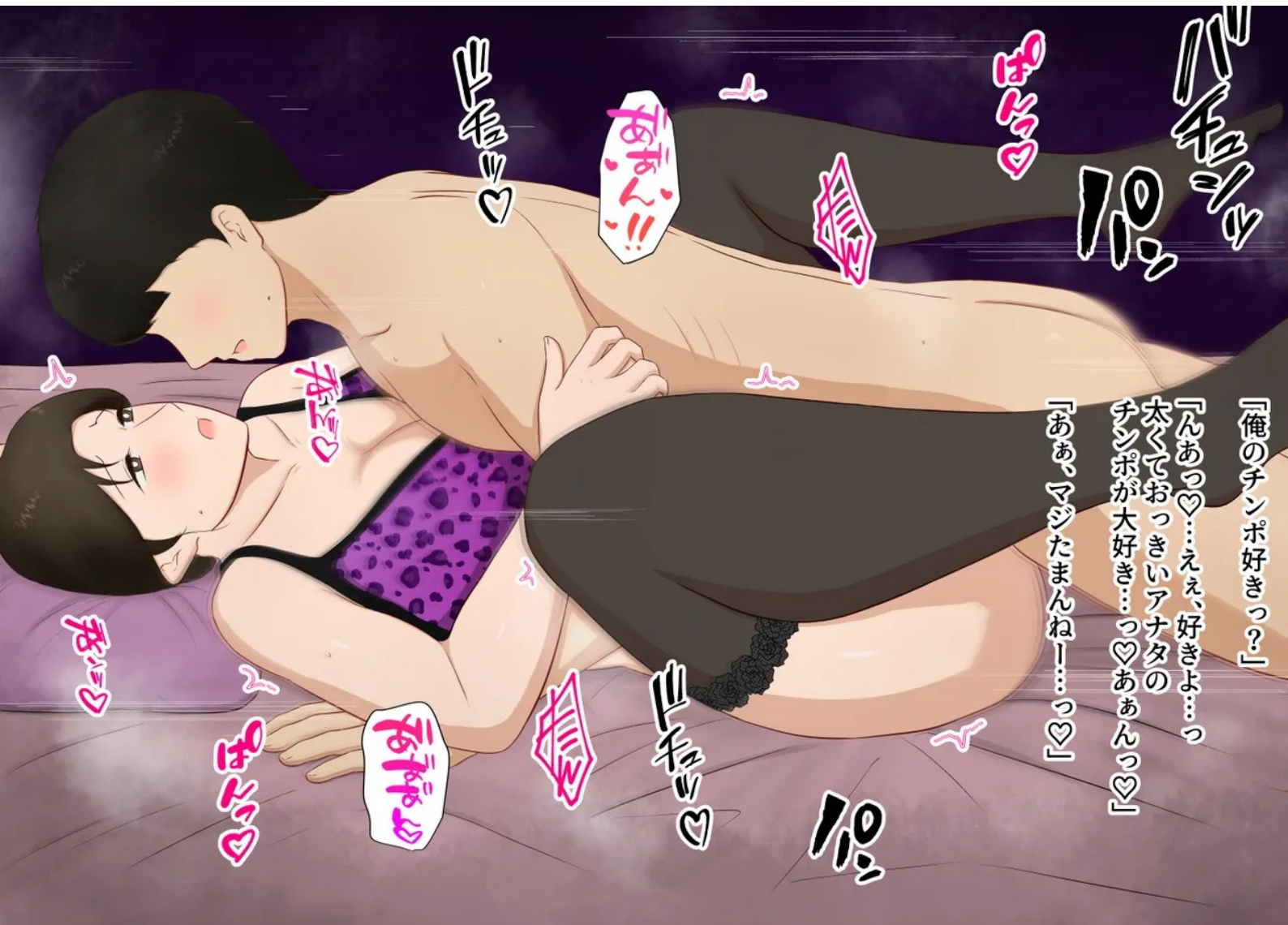
おまんこ♡

おまんこ

おまんこ♡

おまんこ

おまんこ



「俺のチンポ好きっ?」

「んあっ♡…ええ、好きよ…っ
太くておっきいアナタの
チンポが大好き…っ♡ああんっ♡」

「ああ、マジたまんね…っ♡」

「このマンコは俺のだからねっ
母さんの身体は全部俺のモノだっ！」

「あっ、ああっ、んおっ♡
こんなに激しくされたらっ♡おっ♡」



「ほら、母さん言うてる」

「あッ♡お、お母さんのおまんこは
アナタのモノよっ、だからっぽら
気持ち良くなって…っ♡あんっ♡」

「ううッ…！」

「ふーっ、ふーっ…っ！」



♡♡♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡





結局、また徹夜でやりまくった
俺と母さんはチェックアウト前に
シャワーを浴びて

「やだ、またおつききになってるわよ…♡」

「だってこんなエロいキスされたら…♡」

「だめよ、もうおしま…♡」

「え…」



「リゾート行ったらやりたいことがあるんだよね」

「そうなの？」

昨日母さんに着せた下着姿の破壊力…
もっと凄い恰好をして欲しい…！

もっとエロくなった母さんと
やってやってやりまくりたい…っ

そんなことを考えながら、俺たちは
家路に着いたのだった…

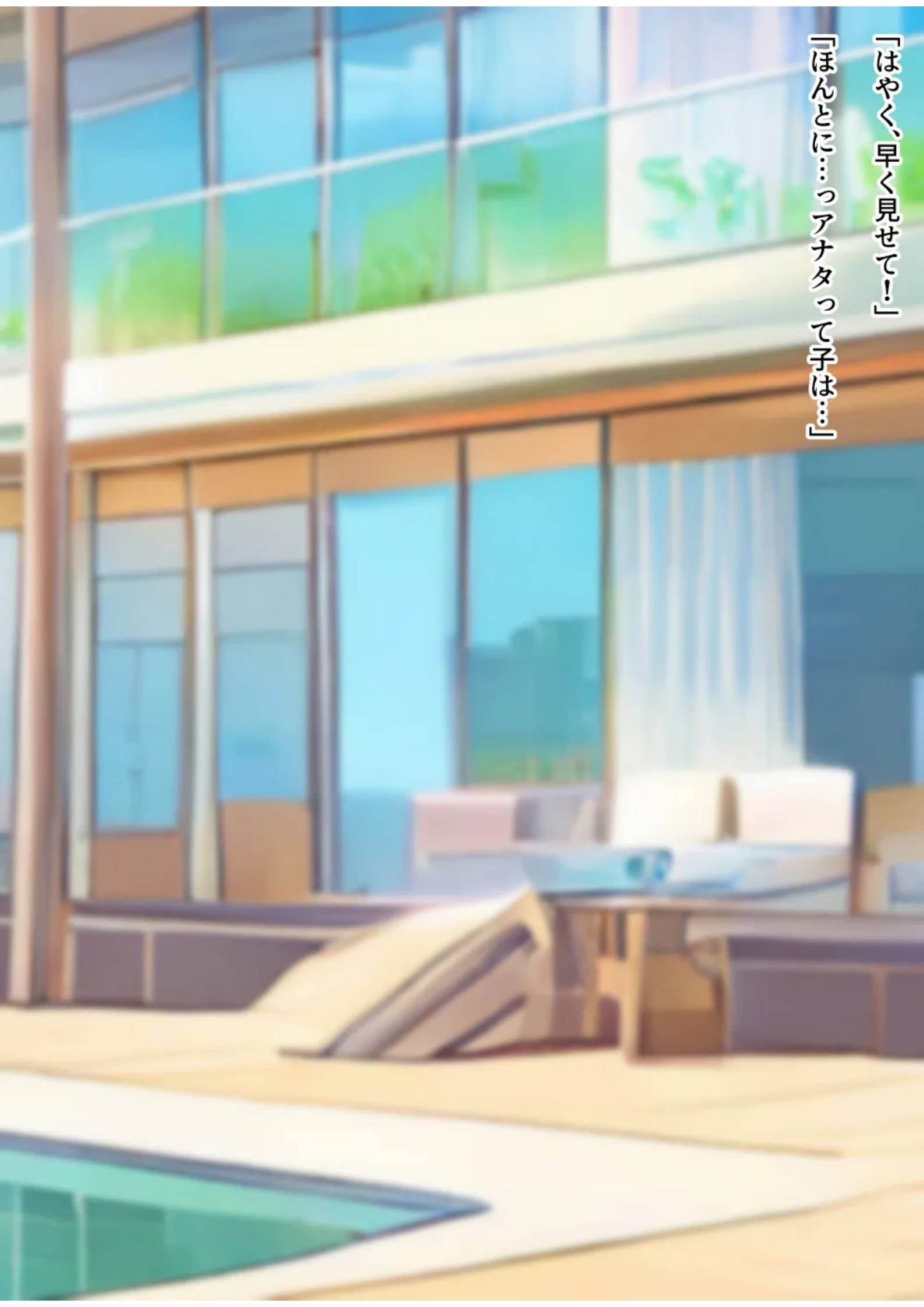


旅行当日、
リゾートホテルに着いた二人は
荷物を置いて早速プールへ向かった。



「はやく、早く見せて!」

「ほんとに……っアナタって子は……」



急かされた私は恥ずかしさを抑えつつ
息子の前に姿を晒す。

「うおお!!エッロ!!やばすぎー!」



ホテルに着くなり息子がプールを催促するので
何事かと思えば、私にこんな恰好をさせるのが
目的だったことに半ば呆れてしまう。

昔、グラビアアイドルが
こんな水着を着て話題になっていた
ことを思い出し、自分が同じ姿に
なっていることを考えると、
顔から火が出そうなほど恥ずかしい。



…それなのに、身体をほとんど隠せていない
こんな変態じみた水着を着ているのに、
どこか開放感というか高揚感を感じている
自分がいた。
息子にこんな恰好を見られて、
私は興奮している…？
(どうしちやっただの、私…っ)

「…さん、母さん？聞いてる？」

「えっ!? な、何か言った？」

あーっ
♡♡♡
♡♡♡

ぞまッ

ぞん♡
♡

ぞまッ



「だから、他にも色々持ってきたから
いっぱい楽しもうねって」

「まだあるの!?!」

「さて、とりあえず…」



私は軽々と息子に抱えあげられた。

「あっ！だめよ、こんな所で…っ！」

「大丈夫だって、ここにいるのは俺たちだけだよ？」



ぐわっ

「ほら、見てよ。母さんを見ただけで
こんなになっちゃた」

息子のペニスを見て、改めてその大きさに
思わずごくり、と生唾を飲む。
力強く勃起した男根は太く立派に
反り返っており、私に向けられた性欲を
ハッキリと感じる。

あんなに淫しいモノで今貫かれたら…
そう考えるだけで私の膣内は
湿りを帯び始めていた。



「というか、その…重くないのっ?」

「全然?最近鍛えてるからね」

「そ、そう…」

確かに最近、体つきが逞しくなったように思っていたが、まさか自分が抱えあげられることで息子の男らしさを感じるようになるとは思わなかった。

いや

物

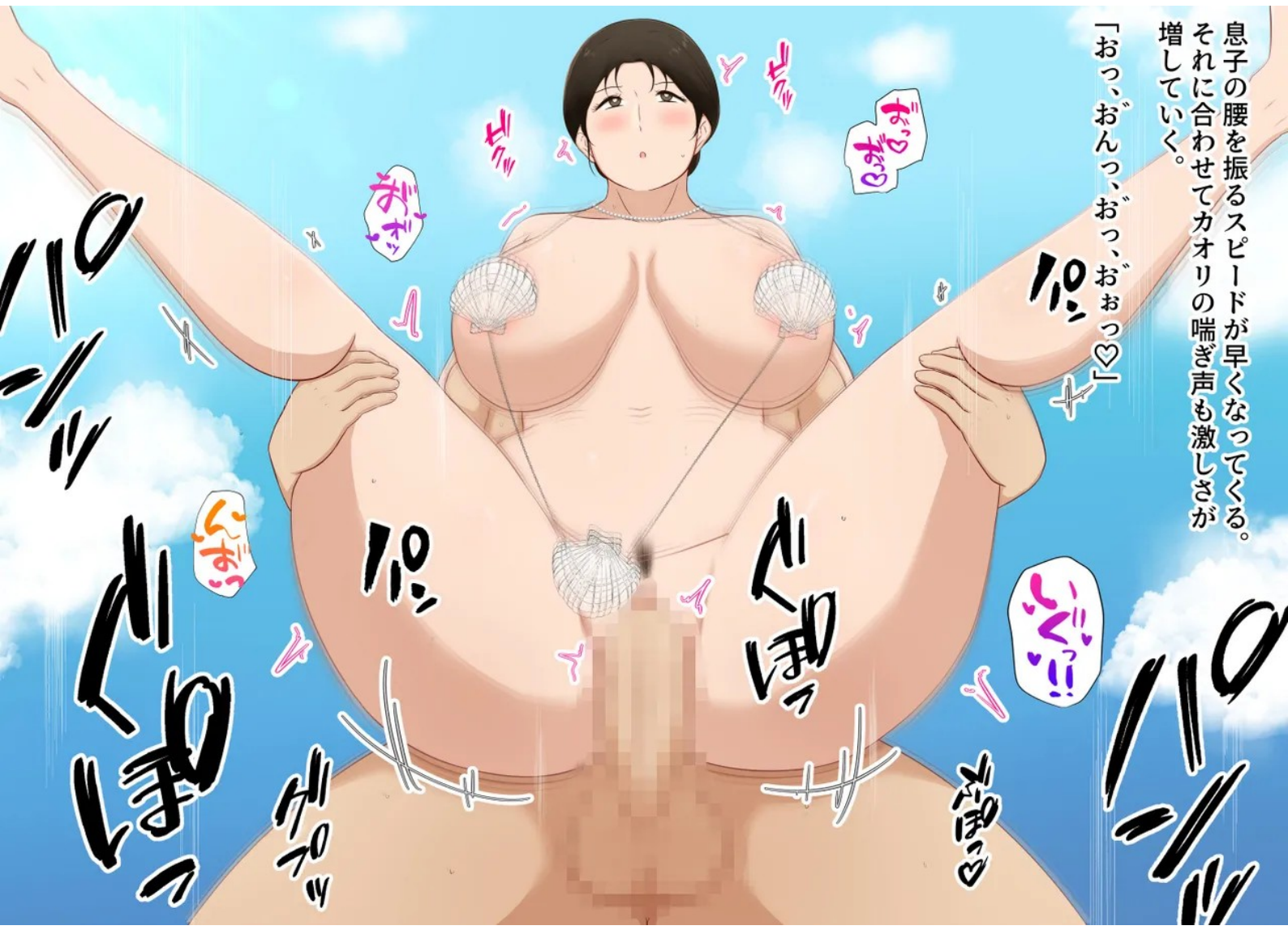


「母さん、俺…もう我慢の限界、チンポ入れるね…っ!」

「あ!ちょ…ちょっと待ちなさ…ッ」

息子の腰を振るスピードが早くなってくる。それに合わせてカオリの喘ぎ声も激しさが増していく。

「おっ、おんっ、おっ、おっ♡」



「もうっ、いきなりあんなことしてっ」

落ち着いた私は息子を窘める。

「ごめんごめんっ…でも母さん、
メチャクチャ濡れてたよね」

「!そ、それは…っ」

私は答えに窮する。

事実、この開放的な場所で行った
セックスは、普段の日常では味わえない
快楽を私にもたらしていた。



「ほら、一緒に入る」

「あつ、調子が良いんだから…」

後ろから抱かれながらプールに浸かる。どうやら温水プールだったらしく、お風呂のような心地良さがあった。

「母さん、良い匂いがする」

「やだ、ヘンなこと言わないの…っ」

鼻息が首筋に触れ、背中から息子の体温が伝わってくる。全身が包まれる感覚に、女として安心感を覚える。



「俺、母さんのもっとエロい姿が見たい」

「もっと、って…」

「衣装だけじゃなくてさ、もっと
内側から母さんを俺の『オンナ』に
していきたい」

『…』

オンナにする、息子の口から出た言葉に
カオリは胸の奥が熱くなるのを感じる。
若いオスから女として見られていることに
喜びを感じると共に、心の中に眠る
新しい自分：「淫らな」自分の
存在をカオリは自覚し始めていた。

お母さん♡



「…ふふっ、先っぽ…当たってるわよ♡」

「ごめん、また勃起してきちゃった」

「…しょうがないわね…♡」



「あっ、うあッ……! 母さん、激し……ッ!
そんなにされたら直ぐに出ちゃう……ッ」

「んむっ♡おのきのお返し……♡
らむむも出してららわよ……♡」





お風呂

お風呂

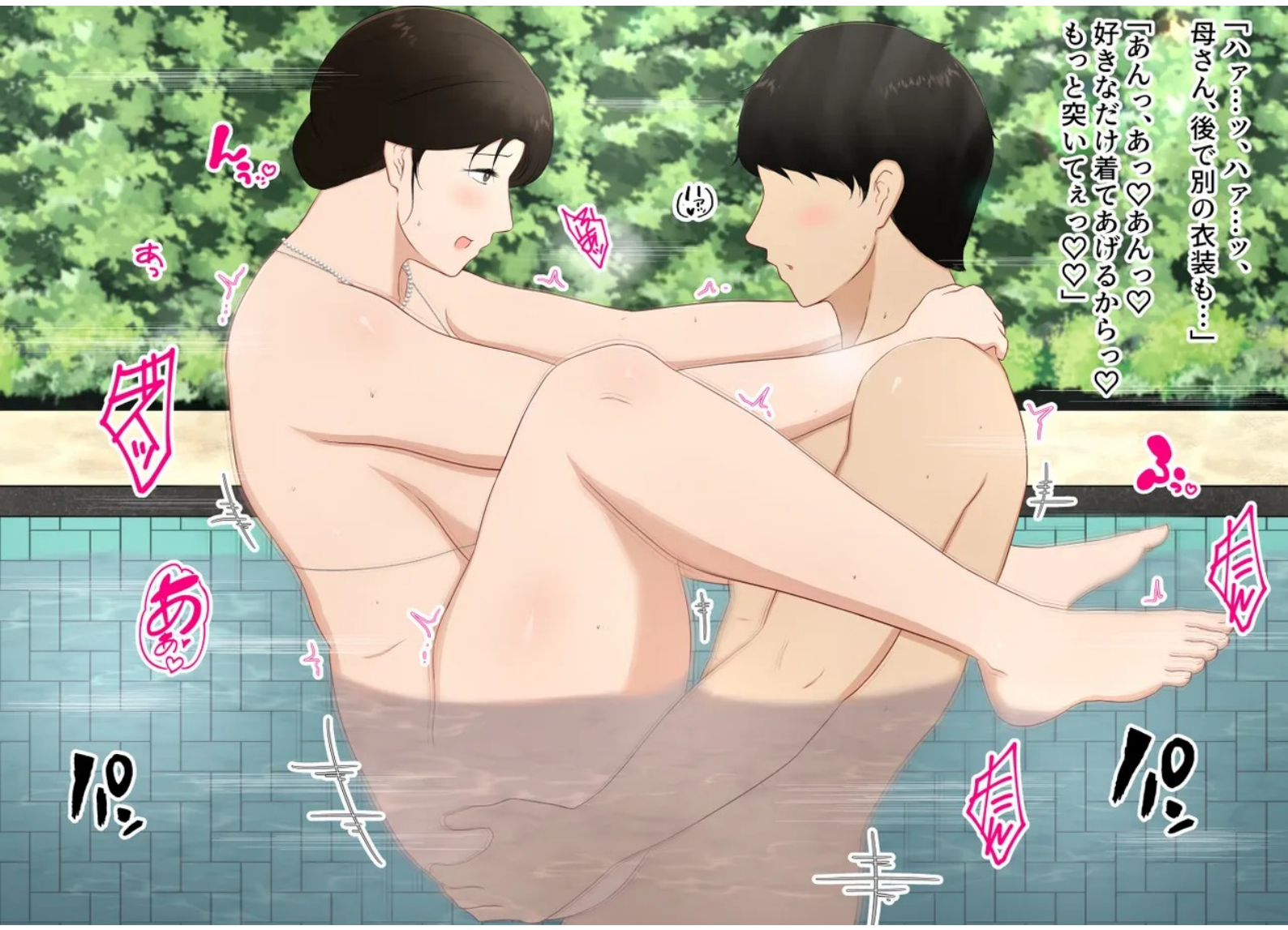
お風呂

お風呂

お風呂

「ハア…ツ、ハア…ツ、
母さん、後で別の衣装も…」

「あんっ、あっ♡あんっ♡
好きただけ着てあげるからっ♡
もっとないでえっ♡♡」



んっ♡

んっ♡

あ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡

んっ♡



その後、セックスを終えた私たちは
プールから上がり、近くの海岸を散歩したり
お店を周ったり…
やっとリゾートらしい休暇を過ごした。





「どう、かしら…♡」
私は息子の望みどおりに、衣装を身に付けていた。
昼間は羞恥心が勝っていたが、今の私はこの子に
もっといやらしい目で見られたい、
もっと興奮してほしい…
そんな感情が渦巻いていた。

「マジやばい…
エロすぎて頭クラクラする…っ」
「ふふ、なによそれ」

おっぱい

お尻

♡
♡
♡

♡
♡
♡



「ああ…♡もっとお母さんを見て…♡」

「はあっ…はあっ…♡くっ…♡」

息子の生唾を飲む音が聞こえ、刺すようないやらしい視線が私の身体を更に熱くする。

「オシナ」として見られることがこんなに興奮するなんて…♡

♡ ボン / ♡

♡ ヌサ ♡

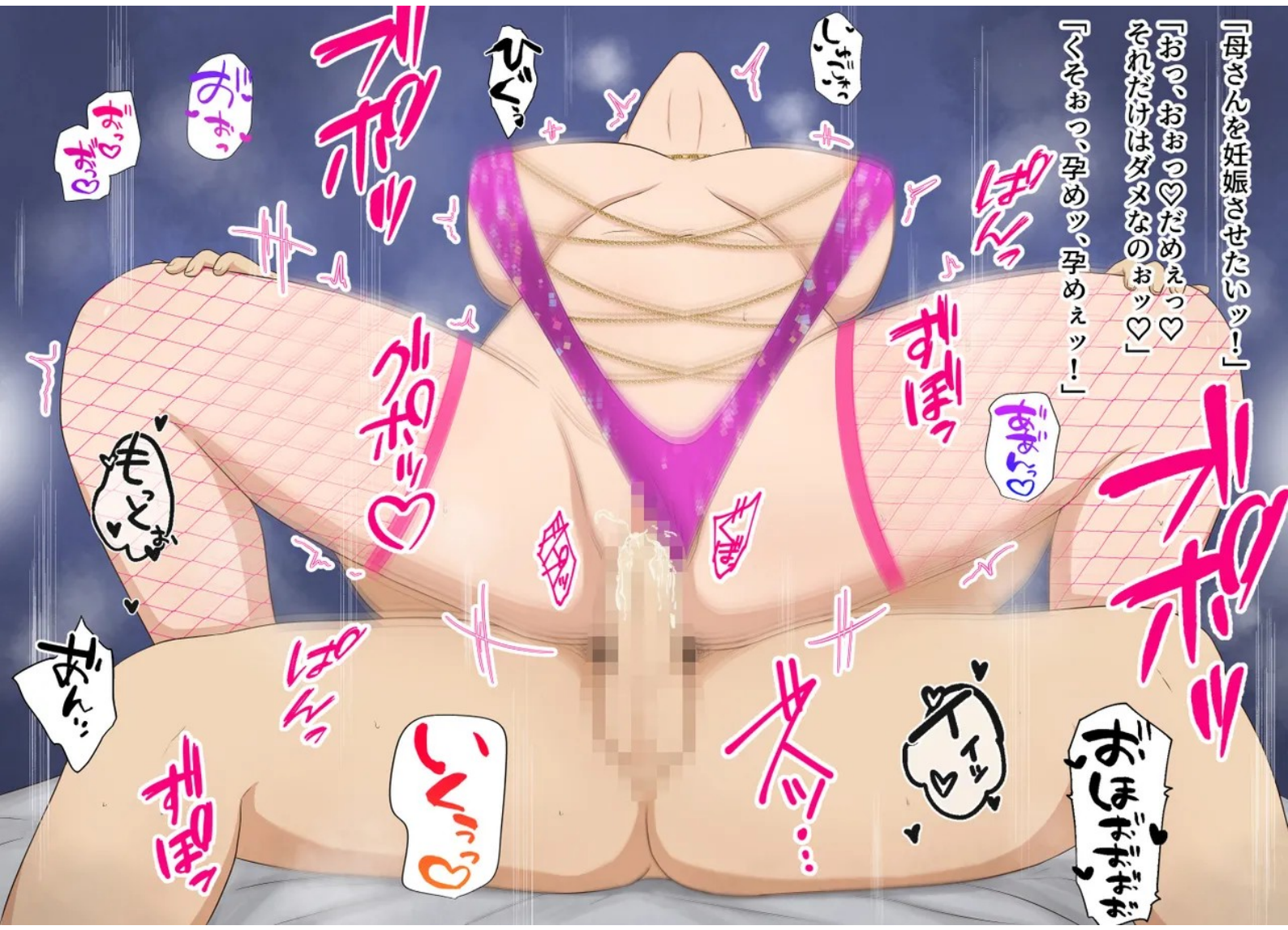


「母さんを妊娠させたいッ！」

「おっ、おっ♡だめえっ♡」

「それだけはダメなおっ♡」

「くそおっ、孕めッ、孕めえッ！」



「母さんのこと本気で愛している♡」

「♡♡」

息子のストリートな言葉に
どうしようもないほどに胸が高鳴る。
愛するオスに心もカラダも攻略され、
膣内にとろとろと愛液が溢れ出す。



「あぁ♡あんな♡うまい♡あぁ♡♡
私♡♡お母さん♡♡...♡♡
あなたの♡♡愛♡♡♡♡♡」

おっ♡

おっ♡

どぶぶっびゅびゅるるるるっ！

「ふっおっおっ♡♡♡」

膣内に大量の精液が放出される。
息子に「種付け」される興奮で
カオリは何度も絶頂を繰り返す。

んんん

おっおっおっ♡♡♡

おっおっおっ♡♡♡

んんん

おっおっおっ♡♡♡



ちゅ、ちゅ、ちゅっ…♡

「か、母さん…っ？」

気付けば無意識に息子の頬に接吻をしていた。自分を絶頂させたオスを労うように何度もキスをする。

♡♡♡

ちゅっ♡

♡♡♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

♡

ちゅっ♡

♡♡♡

「んっ…ちゅっ…♡」

さっきのセックス、すごかった…♡
とってもカッコよかったわ…♡

「俺も…めっちゃくちゃ気持ちよかったよ」

ちゅっ♡



♡♡♡

♡♡♡

「母さん、知ってる？この国のどこかに
親子で子作りする村があるんだって」

頬に私のキスマークを付けた顔で、息子が
目をキラキラさせながら突飛なことを言い出す。

「えー？そんな話どこで聞いたの？」

「ホントだって！ネットに書いてあって…」



「…もしホントならさ、いつか
母さんと一緒に行ってみたいな…」

息子に身体を許している時点で
言い逃れもできないのだが、
避妊をすることで今の私は
夫に対する最後の二線を守っている。

しかし、いつか…いつの日か
愛する男の、息子の精子で孕みたい…
そう思ってしまう自分が
いることも事実だった。



「それで…次はお母さんに
どれを着せたいの？」

「えーっとね…」



「どう？アナタにはお母さんがどう見える？？」♡」

息子が品定めするような目で私のカラダを上から下まで見ている。それはまるで、これから犯すメスの味見をするような視線だった。

♡ はあ♡

♡ はあ♡

♡ はあ♡

♡ はあ♡

♡ はあ♡

「はあ…っ、はあ…っ、最高にエロくてキレイで…！ああくそ…っ、俺マジで母さんのこと好きすぎておかしくなりそう…っ」



「あ、ん、あ、ん、お、っ♡
チンポの奥まる...キ、ッ♡」

「あ、ん...の、母、の、ん、激、ッ...♡」

私が喘げば喘ぐほど、乱れれば
乱れるほど息子のムスは
太く硬くなっつてく。

ム、ッ♡

ム、ッ♡

ム、ッ♡

ム、ッ♡

ム、ッ♡

ム、ッ♡

ム、ッ♡

ム、ッ♡

ム、ッ♡

もはや恥じらうもなく息子のムスを
腰を振る私は、ただひたすらに
男を貪る「ムス」になっていた。





どくどくと精液が膣奥へと送り込まれる。
一滴たりとも逃すまいと膣を締め付け、
子宮へと精子をため込んでいく。
愛する「オス」の精を受ける喜びを改めて
実感する。



親子で関係を持つようになって
どれくらい経っただろう。
今までは身体を重ねるときは常に
『母親』であることを意識していた。
それが最後の二線を越えないための
防波堤のようなモノだった。

しかし、今の私は『母親』であると同時に
この子の『オマンコ』であることも
喜びを覚えてしまっている。
この子に求められて、心も
カラダも愛してもらえることが
たまらなく嬉しくて…

息子が言っていた、親子で
『子作り』ができる村…
もし…そんな場所が本当にあつたら、
私はどうするだろうか…

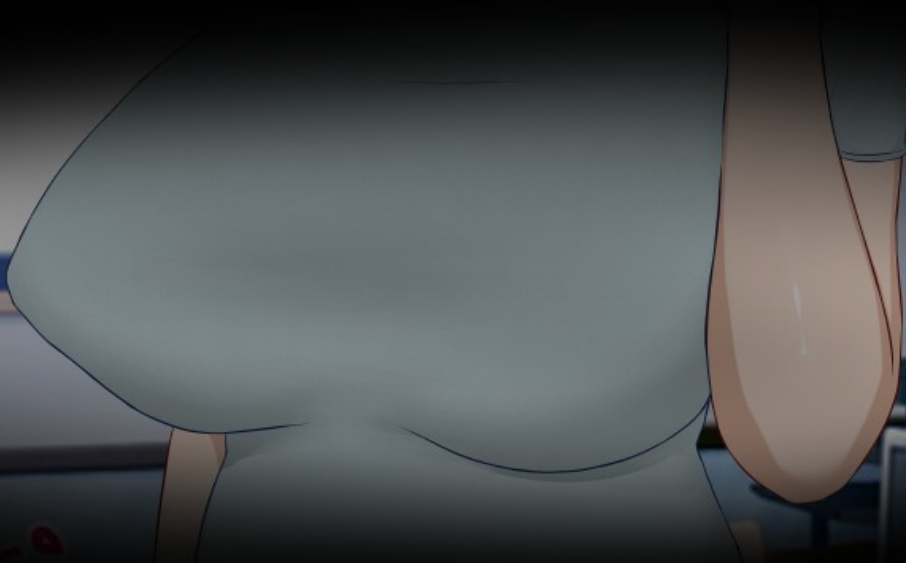
セックスを終え、息子が横で眠る
布団の中でそんなことを考えながら
私は眠りについた…





「ほら、もう起きななな」

ん……？朝か……泊まりに来てるんだから
別にちよっとくらくら……あれ？



目を開けるとそこは俺の部屋だった。

「あ、あれ…俺たち旅行に行ってる…
え!?か、母さんそのお腹…!」

「なんでそんなに驚いてるの?
アナタの子でしょ?」

どういうことなんだ。

ポッ
ライ
♡



母さんのあまりにも衝撃的な姿に
俺は言葉が出ない。

俺が？母さんを？いつ？
そもそも俺たちはリゾートに
旅行に行ってたはず…



だめだ、全く思考が追いつかない。
限界に達した俺は、
次第に意識が遠のいていった—

「あら、起きたか？おはよう」

目を覚ますとリゾートホテルの
ベッドの上だった。

「…おはよう」
…夢だったか…。

「?どうしたの」

「…すごくいい夢を見たんだ」

「あら、どんな夢？」



この後、顔を赤らめて俺の話聞く
母さんが可愛かった。

この時、いつかあの夢を正夢にする—
俺はそう誓った。



END♡